ギリシア文化にみる医の源流

― 死この門に入るべからず ―

水枝谷　渉

鹿児島大学　歯学部附属病院麻酔科

ギリシア神話に登場する医神アスクレピオス Asklepios は、伝説上アポロの息子とされているが、正しくは紀元前1200年頃ギリシアで多くの奇跡的な医療を行った実在の人物であったと思われる。彼を神と崇めて祀ったアスクレピオス神殿の遺跡は、現在ギリシア中のエピダウロス、コス、アテネなどに数多く残されている。当時、病人達はこの神殿に治療を乞い、一夜をそこの宿舎で眠って過ごすとき、アスクレピオスまたはその弟子達の神官から神のお告げを聞かされ、翌朝、病気が治って帰って行ったとある。この治癒のことを記した碑がエピダウロスに多く残されているが、失敗や死については記されていない。このアスクレピオス神殿には「死この門に入るべからず」という鉄則があったと伝え聞くがそれは『医に携わる者は己の知識の限界を知り、仮にもこの門から死者を出してはならない』という医の戒めと責任を教えたものであろう。当時の医療水準が低かったことは想像に難くない。不本意ながら死ぬ者もあったと考えられるが、エピダウロスに残された碑に、失敗や死の記述がないのはこの本意に悖ることもさることながら、この格言を少なくとも、この当時から治療を乞うて来たものに対する医の行いの規定と倫理を説く嚆矢として残すことと、治療に成功したもののみを後世に伝えようという意図であったと思われる。神殿で一夜を過ごさせるが、翌朝神のお告げを伝えて帰しているのは、神域を死で汚さぬ計らいでもあり、神のお告げとはおそらく予後の予見を含めた療養のあり方であったと思われる。食事、入浴、運動が治療法の主なものであったらしいが、この神殿は今日の保養地の原型ということができる。キリスト教の時代になってもこのお籠りの儀式はずっと長く続き、ギリシアやエーゲ海の島々、イタリア南部、シチリア島、サルジニア島では病人が教会へ行き一夜を過ごしたことが記録に残されている。眠らせるための催眠剤として主に酒が用いられたが、教会ではこれを自家醸造によって常備した。今日なおワインのラベルに僧侶が描かれていたり、オーストリアの壮大な葡萄園が教会の管理下にあること、またベルギーのシトー派トラピスト教会に特殊な醸造法が伝え残されていることは、このことの由来を物語っている。

医学思想が魔術や宗教からいくぶん離れはじめた紀元前460年頃、コス島に生まれたヒポクラテス Hippokrates（B. C. 460頃－B. C. 375頃）は一代の名医となり、医学の父と仰がれるようになる。ヒポクラテスの伝記はごくわずかしか知られておらず、その正確な出生も没年次も明らかではない。コスやアテネをはじめギリシアの諸地で医療を施し、医学を教え、高齢で没したというだけである。しかし『ヒポクラテス全集』を読むと、彼の医学思想が宗教的なものを脱却し、科学的な医学の祖とするに足るいくつかの記述を挙げることができる。その全集の中の『金言集』Aphorismi は19世紀まで教科書として使われた。その『金言集』の最初に「人生は短く、技術は長い。機会は逃げやすく、実験は危険をはらみ、判断は難しい」という有名な文句がある。全集の中にはもちろん時代おくれの記述も少なくないが、医師の教育や医療に関して驚くほど近代的感覚を含み、現代の臨床医が学ぶべき価値は大きい。ヒポクラテスは病気を神のたたりとか悪魔の仕業であるという考えかたを一切排除した。その頃、癲癇が神のたたりによる神聖な病気といわれていたが、彼は「他の病気と同様、それは決して神聖なものではなく、自然の原因を持ち、それを神聖としたのは人間の無知のためである」と述べた。また「すべての

病気は、それ自体の性質を持ち、外的な原因で起きる」として、その原因に食物、職業、気象の影響を重くみた。ヒポクラテスはもちろん体温計も聴診器も持っていなかったが、彼自身の観察力と合理的な考えかたにより、病気の進行を予見するすぐれた診断能力を持っていた。そして彼は、診断よりも予後に一層の重きをおき、「自然の治癒力」をもっとも重要視し、あまり薬を用いず、体調と食事を整え、人間の自然治癒力を助成することを主張している。当時これに反対の立場をとる小アジアのクニドス学派は、予後や病因を軽視し、徒に強引な病名をつけて治療する方法をとった結果、症状も診断も混同したのと対象的である。ヒポクラテスの治療法は現代医学の基本でもあり、この時代にこのような見解と信念をもった彼はただ偉大というほかはない。ヒポクラテスが残したおそらく最大の贈り物は、いわゆる「ヒポクラテスの誓い」であろう。医師の行いを規制し、医の倫理を説いたもので、現在でも数多くの大学や医学校で卒業式に朗読されることは日本ではあまり知られていない。それは次のとおりである。

「この術を私に教えた人をわが親のごとく敬い、必要あるときは、わが財を分って助ける。その子孫を私自身の兄弟のごとくみて、彼らが学ぶことを欲すれば報酬なくしてこの術を教える。そして書き物や講義その他あらゆる方法で私の持つ医術の知識をわが息子、わが師の息子、また医の規則に基づいて約束と誓いで結ばれている弟子達に分かち与え、それ以外の誰にも教えない。私は能力と判断の限り患者に利益すると思う養生法をとり、悪くて有害と知る方法を決してとらない。頼まれても死に導くような薬は与えないし、その相談にものらない。特に婦人を流産させる助けをしない。いかなる患家を訪れてもそれはただ病人を治すだけであり、勝手な戯れや堕落の行いをすべて避ける。女と男、自由人と奴隷の別を考慮しない。医に関すると否とにかかわらず他人の生活について秘密を守る」。

そしてこれは法律ではないから罰をもっておどすわけではないことも付け加えている。この「誓い」のすべてとはいわないが、少なくともその本意は2,000年あまりも西洋医学を踏襲する医師達を導いてきたのである。

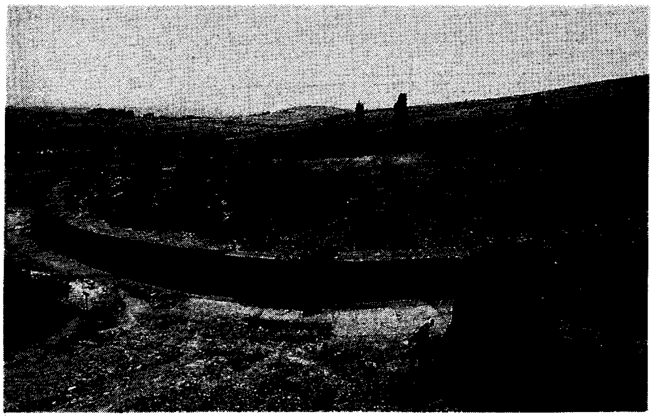
ヒポクラテスのすぐあとにアリストテレス Aristoteles (B. C. 384−B. C. 322) が輩出する。彼は偉大な哲学者として有名であるが、哲学だけでなく、生物界を広く研究し比較解剖学と発生学を樹立した生物学者でもあり、医学にもはなはだ大きな功績を残している。しかし、その後ギリシア文化は本土で次第に衰退の色を濃くし、やがてその舞台をアレクサンドリアへと移してゆく。アフリカ北部エジプトの一角になぜその舞台が移って行ったか、そこには有名なアレキサンダー大王の少なからぬ影響が背景に存在する。

旧ユーゴー南部一帯に君臨したマケドニア国王フイリップ二世は、息子アレキサンダーが13歳のとき首都ペラの近郊に学問所を造り、そこにアリストテレスを招聘して政治、地理、生物学、医学などを幅広く学ばせた。期間はわずか3年であったが、アレキサンダーはのちに「わが生涯でもっとも楽しかりしとき」と述べている。なかでも古くからギリシア人がマケドニア人を野蛮人と呼んでいることをアリストテレスに問い糺した際、それを否定し民族学的に同一であること、同じ血が流れていることを説明したアリストテレスに深く傾倒した。弱冠20歳で王位を継承することになったアレキサンダーはギリシアの各ポリス（都市国家）を統一、永年身辺を脅かしたペルシア軍を打ち破り、その支配下に苦しんでいたエジプトを救ってアジア・ヨーロッパにまたがる大帝国を築いた。そしてナイル河口の三角州ファロ島に、予てからの宿願であった理想郷の建設を目指し、わが名に因んでアレクサンドリアとした。アリストテレスに強く感化されたアレキサンダー大王は、幼いころ学んだ学校や図書館を建設し、学問や研究を奨励した。アジアとヨーロッパの結び目として海路、陸路とも地の利を得たアレクサンドリアは、世界各地の文化をここに集め、ギリシア本土の文化も次第にこの地へと移って行き、のちの紀元前一世紀頃には人口100万人にも達したといわれる。やがて紀元前300年頃ここに有名な医学校が出来るが、惜しくもアレキサンダー大王は熱病に侵され、果てしない夢半ばにして紀元前323年、33歳の生涯を閉じている。この地が果たした大きな役割の一つは、いわゆるヘレニズム文化興隆の拠点となったことである。すなわちペルシアおよび地中海東部を中心としたオリエント文化と純ギリシア文化が溶け合ったヘレニズム発祥の地として、ヘブライズムとともに西洋思潮の二大源流の一つを生んだ。このアレクサンドリアの医学校に二人の著名な医学教師がいた。その一人ヘロフィロス Herophilos は解剖学の本を世界で最初に書いたといわれ、もう一人がエラシストラトス Erasistratos で、一部の人は彼を生理学の祖としている。彼は空気が肺から心臓に入り、動脈により体中に行き渡ると考えた。解剖学名 Aorta（L., Gr. *aorte*）の語源は、aero すなわち空気に由来している。当時ローマは医

学のことはギリシア人にまかせていたので、アレクサンドリアがのちにローマ帝国の支配下になっても、医学教育の中心は依然この地に残された。

アレキサンダー大王の死後，広大な帝国の領土はマケドニア、エジプト、シリアの三国に分裂し、それぞれの王国で内乱が起こるなどして団結を怠ったため、紀元前一世紀ごろまでの間に三国ともローマ帝国に滅ぼされてしまう。が、その中にあってただ一国ベルガモン王国はローマと協力関係を保ちながら交易によって発展を続ける。この国はアレキサンダー大王の武将であったフィレタイロスが、現在のトルコのベルガマを中心とした地に築いた王国であるが、後世アッタロス三世の死とともに終焉を迎えるかに見えたこの王国は鮮やかな転身を遂げる。すなわちその遺言により、全土はローマに託され、以後ベルガモンはローマの属州としてなお繁栄を繋いだ。

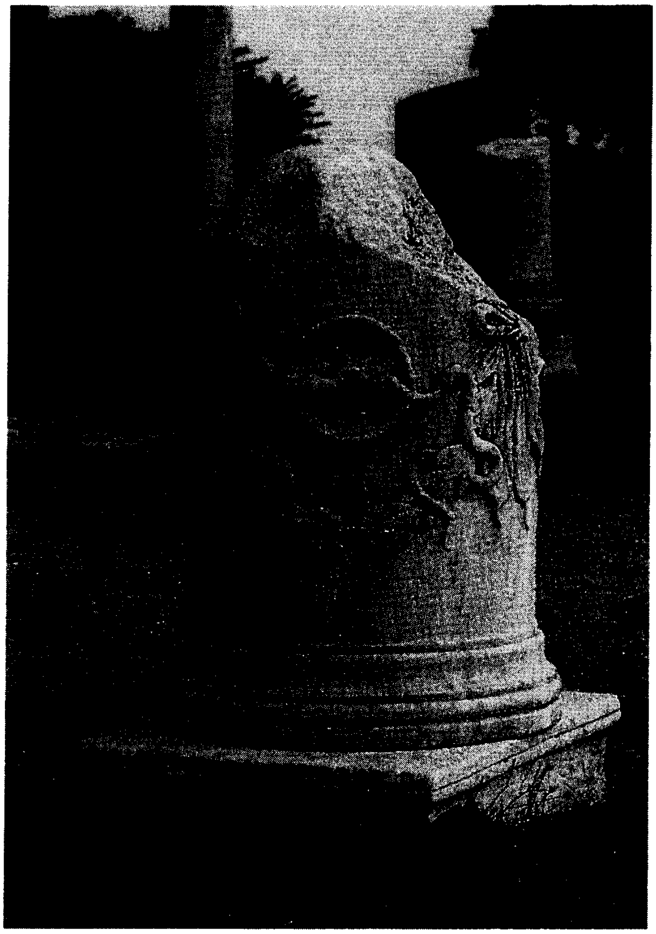
アナトリア半島をエーゲ海に沿って南下すると、トルコ共和国第三の人口を擁する港湾都市イズミールに至る手前100kmほどに、川を挟んでベルガマという町が拡がる。市街地の北の丘に聳え立つ壮大なアクロポリスは、かつて繁栄を極めたベルガモン王国の遺跡であるが、このアクロポリスの南西およそ2kmのなだらかな丘陵地帯に、神域であると同時に一大医療センターの構想を持っていた「アスクレピオン」の遺跡がある。それはエピダウロス、コス、アテネなどに残されている「アスクレピオス神殿」と同じ理念の遺跡であるが、歴史的にはずっと降ってギリシアの有名な医師で気管切開の創始者といわれるアスクレピアデス Asklepiades (B. C. 128－B. C. 56) が、紀元前91年にギリシア医学をローマに移し、同時に多くの優秀な医師を育成した際、ギリシアのアスクレピオス神の信仰を受け継いだローマ人によって紀元数年前この地に建てられたという。入り口には「神命により、死この門に入るべからず」と刻んである。やがてこのアスクレピオンは、いわば本山ともいうべきギリシアのエピダウロスにあるアスクレピオンに比肩するほどの信望を集めるが、それにはこのベルガモン出身で哲学者でもあり、またのちにローマ皇帝の侍医を務めたガレノス Galenos (A. D. 130頃－200頃) に負うところが大きい。


ベルガマ市街地の南西に残るテレフォロス神殿の遺跡
円形の建物の中が施療の中心であった（小田陽一氏提供）

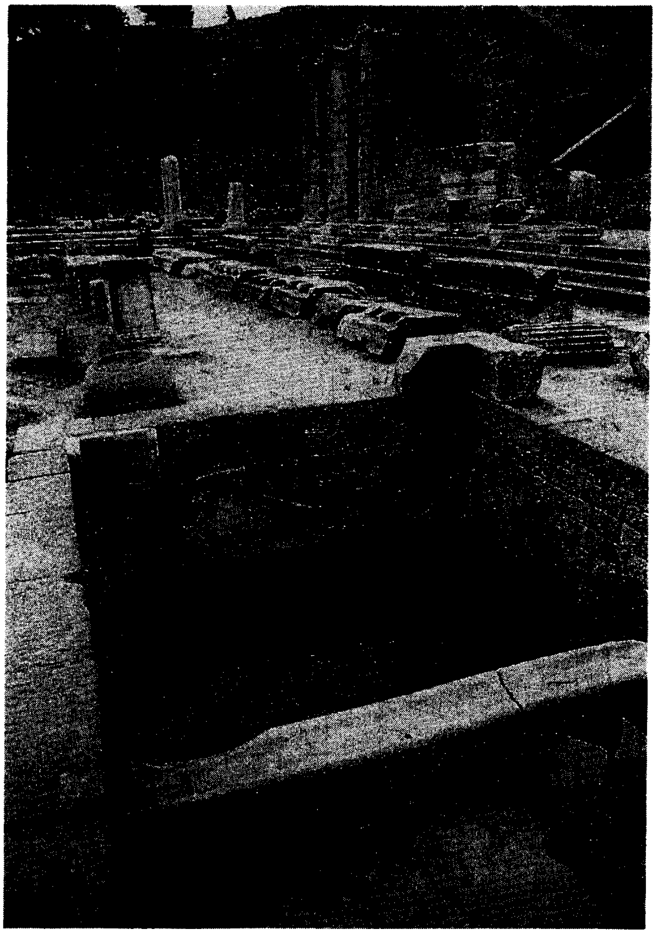
アスクレピアデスは確かに医学に寄与するところ大ではあったが、ヒポクラテスの体液学説と反対の「緊張と弛緩」の学説を唱え、哲学者デモクリトス Demokritos の原子説を基にして、体を構成する微粒子の物理的状態によって健康と病気の別が生ずるという信念を曲げなかった。しかし治療法はやはりギリシア式を出でず、マッサージ、新鮮な空気、強壮剤、特に正しい食事と酒をすすめている。彼の死後その学説を継いだ人々ははなはだ独善的になり、病気の本体について多くの論争を巻き起こした。この諸説紛々たる時代がガレノスをもって終結する。

ガレノスはヒポクラテスの体液学説を奉じ、実験生理学の樹立者であった。彼は動脈が空気だけでなく血液を含むことを認め、心臓が血管内の血液を潮の満干のように運動させると考え、今日の血液循環説の一歩手前まで到達している。当時、まだ人体解剖は許されておらず、彼はサルやブタで間に合わせているが、もしそれが人体で許されていたらおそらく生理学はもっと速い進歩を遂げたであろう。ガレノスは著書の数も多く、また自説に強い確信をもって述べたので、その後十六、七世紀に至るまでなんぴとも反論できない医学の権威とされた。ベルガマの市街地を横ぎる流れは、今もガレノス川の名が付されたまま悠久と水を湛えている。彼はベルガモンの誇りであり象徴でもあった。

ガレノスにまつわるエピソードは多い。なかでも「毒をもって毒を制する」ことの事実を目のあたりにした彼の体験は、経験医学の重要性をさらに印象づけることになる。あるとき、杖に縋った一人の男がアスクレピオンを訪れ施療を乞うが、ガレノスは拒否する。治癒の見込みのない患者は、その門を潜らせないというのがアスクレピオンの掟である。「死この門に入るべからず」という入り口に刻まれた言葉は、医の限界と責任の教えとしてアスクレピオンに受け継がれていたのである。命運を悟った男は、二匹の蛇を捕らえ、毒を椀に吐かせてそれを一気に呷った。死ぬと思われた患者は、毒が効を奏して病気が治ってしまう。これを知ったガレノスは「使いようでは毒が薬になる



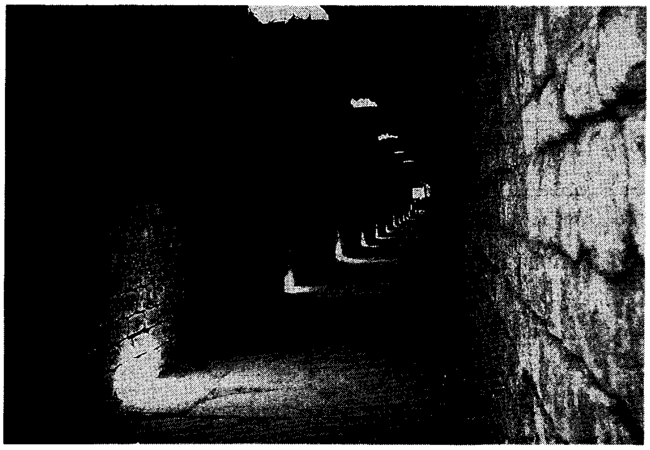
石柱に刻まれたアスクレピオンの象徴
二匹の蛇と椀の浮き彫り（小田陽一氏提供）



沐浴のための泉の跡（小田陽一氏提供）

と考えてはいたが、実際に試してみるわけにはいかなかった」と語り、ヒポクラテスの教えと戒めを暗に弟子たちに諭したという。新たな知識を得たこの偶然をアスクレピオスの神託と信じた彼は、椀と二匹の蛇をアスクレピオンのシンボルとした。ベルガモンの遺跡に残る石柱に今も刻まれているこのシンボルは、のちに「一本の杖に纏わる蛇」を医のシンボルとする原型となる。

アスクレピオンの施療の中でもっとも効果的であったのは、テレフォロスの神殿に於ける神のお告げである。聖なる泉で沐浴した患者は大理石を敷きつめた地下道を通ってこの神殿に向かう。途中に設けられた天井の明かり採りの窓から神秘な光が注ぎ、それが患者を敬虔な雰囲気に誘う。神殿に設けられた小さな部屋で眠りに就くと、やがて夢うつつの中で神のお声が薬石や療法を告げてくれる。神のお声とは、実際には神殿の壁に埋め込まれた石管を通じて神官が囁きかけたものであったらしいが、当時としてはこのトリックが治療に絶大な効果をもたらした。テレフォロスの神



大理石を敷きつめた地下道
頭上から射し込む光が微妙な雰囲気を誘う（小田陽一氏提供）

殿、遠くから聞こえてくる神の声、今日のテレフォンの語源であろうが、このトリックを知っていた患者も少なくなかった筈である。が、彼らにはアスクレピオンの医師たちに対する信頼があったし、医師たちにはアスクレピオス神への篤い信仰があったことは疑いも

ない。患者と医師との間にある信頼関係もまた、遠くギリシアにその源流を見ることができるが、医師が医の源流の精神を忘れたとき、それは音をたてて崩れるのである。

テレフォロス神殿の壁に埋め込まれた石管
ここから神の囁きが患者に伝えられた（小田陽一氏提供）

参考文献

小川鼎三：医学史，古代ギリシアとローマの医学より，BRITANNICA INTERNATIONAL ENCYCLOPAEDIA, No. 1, P. P. 707 - 734, TBS-BRITANNICA CO., LTD., TOKYO, 1972

小田陽一：アスクレピオン－古代ローマの一大医療センターより，J. Siesta, No. 3, WINTER, P. P. 129 - 130, SIESTA CO., LTD., TOKYO, 1988